



これからの介護が描く
ユニバーサルな明るい
未来予想図。

介護の
最前線

Interview

介護環境が
大きく変化の中で
ケアマネジャーに
求められる「しんか」

株式会社 千葉福祉総合研究所 代表
助川未枝保さん

特別
寄稿

中国・広東省の 褥瘡ケアの現状

中山大学附属腫瘍防治センター
高級看護師 ET ナース 鄭美春さん
东莞市大朗医院 ET ナース 張艶紅さん

「H.C.R. 2015」清水宏保さん スペシャルトークショー



平成27年10月7日(水)～9日(金)に東京ビッグサイトで開催された「第42回国際福祉機器展 H.C.R. 2015」。ウェルビーHCをはじめとする製品の展示とともに行われた、長野五輪スピードスケート500m金メダリスト清水宏保さんのトークショーの内容を特別に要約してお届けします。

「アスリートが
医療従事者となって
地域に戻っていく…
スポーツと医療の
架け橋となる存在に
なりたいんです。」

僕は身長が162cmしかなくて、「世界で最も小さいオリンピック選手」と言われています。じゃあ、身長190cmもある外国の選手と競うには、量をやればいいのかというところ、そこは質になってくるんですよ。いかにトレーニングの質を高めていって、効果を出すかということになってくるんです。

現役引退後は、大学院に入學して医療経営学の修士を取りました。スポーツ選手が医療の現場に向かう道筋がない現状から、スポーツ選手のセカンドキャリアとしても考えられると思いました。オリンピック選手に税金が投入されていることには、賛否両論があります。でも、将来的に医療従事者になって、国益として国の財産となるような人材がそろっていくようになれば、これはスポーツ選手を育てる意味が出てくるんじゃないでしょうか。そう考えて札幌市で、平成25年に整骨院（アース治療院）、平成26年にはリハビリ特化型の介護施設（リボンリハビリセンターみやのもり）をオープンしました。施設のスタッフは、3分の1が元アスリートなんです。



H.C.R. 2015 タイカプースの様子。新商品ポジショニングクッション「ウェルビー HC」ほか、来場の皆さんに製品を体感いただきました。また、中国向けマットレスの紹介も行っていました。

私の施設の特徴は、エアリーのトレーニングマシンを入れているところなんです。コンピュータと連動しているので、各月を追ってどのくらいの数値が出ているかが分かるようになります。リハビリの効果が目視されると、本人たちの目標設定が変わってくるんです。あと、例えば、片足立ちのときにバランスを取ってる筋肉だから、転倒してケガや骨折をしないためのトレーニングなんだよ」というように、日常生活での意味をはっきりしてあげることが重要です。そうすると、「もっとやらない」となってくるんです。リハビリに飽きがないんです。



Yasuhiro Shimizu

1974年生まれ、北海道帯広市出身。スピードスケート日本代表としてリレハンメル、長野、ソルトレークシティ、トリノと4度の冬季オリンピックに出場。長野では500mで日本人初の金メダルを獲得。平成22年の引退後、北海道札幌市で治療院を開院。また、弘前大学大学院にて医療経営学を学び、平成26年には「リボンリハビリセンターみやのもり」を開院。

Together 編集部発

編集長のひとりごと



Together で初めて海外（中国）の情報を掲載しました。日本と大きく異なる部分もありますが、熱意をもって褥瘡ケアに挑む医療介護関係者の姿は、世界どこでも変わらないと感じました。

Vol.21の発行は2016年3月下旬!

介護の
最前線

介護環境が大きく変化する中で ケアマネジャーに求められる「しんか」

介護保険制度開始から15年。ケアマネジャーにはこれまでに
なかつたさまざまな役割が求められています。認知症でも体
に障害があつても暮らしやすい地域づくり」を提唱する助川
未枝保さんに、現状分析と進むべき方向を伺いました。

株式会社 千葉福祉総合研究所 代表
助川未枝保さん

一般社団法人日本介護支援専門員協会 常任理事
千葉県後見支援センター契約締結審査会 副委員長
NPO法人千葉県介護支援専門員協議会 理事
NPO法人千葉県主任介護支援専門員ネットワーク理事長
船橋市介護認定審査会委員
習志野市介護認定審査会委員
一般社団法人日本福祉用具供給協会 理事

今回取材に訪れたのは、母
親たちが小さな公園で子ども
たちを遊ばせる千葉県船橋市
の住宅街に建つマンションの一
室。去る10月2〜3日に東京

「日本介護支援専門員協会全国大
会in千葉」の実行委員長を務め
た助川未枝保さんは、「介護が
地域包括ケアへと大きくシフ
ト変換されたのは、平成24年度
の介護保険制度改正がきっかけ
で語り始めました。さらに、
平成27年度の改正で拍車が掛

支援サービスも医療も 過不足ない情報を持つ

認知症も含め、できるだけ本
人の意向を中心に考える、とい
う観点も助川さんは挙げます。
その理由は、時代とともに変化
してきた高齢者像です。

「多様な価値観をお持ちの団塊
世代の方々は、高齢者となって
もしっかり自己主張されます。
生活支援サービスを自己選択・
決定される際、ケアマネジャー
の情報も不十分だと、お叱りを
受けることもあります。例え
ば、脳卒中で利き手側の半身が
麻痺していても、利き手交換の
リハビリによって健常時の生
活に近づきたい、といったよう
に、「こうなりたい」という目標を
きちんとお持ちなんです。そ
の思いに添えるためには、ケア
マネジャーもリハビリなど医
療の情報に明るくなることが
望ましいですね」

現状、ケアマネジャーは医療
知識に詳しくない場合が多い
ものの、地域包括ケアの推進に
よって在宅介護が増えれば、医
療知識は不可欠になってくる
といえます。
「介護と医療が共に歩み寄る動
きは出てきています。利用者
を一番近くで見ているのはケ
アマネジャーですから、ちょっ
とした変化でも連絡してくれ
れば指示を出すよ、と言ってく
れるドクターも増えました」
また、老老介護、認知介護、独

かり、ケアマネジャーに求めら
れる役割は大変増えてきたと
言います。

潜在能力の発揮が 本当の自立支援になる

「これからのケアマネジャーに
求められる役割で一番大きい
のは、自立支援型ケアプランに
おける理解度を高めること。
これまでの自立支援は、できる
だけ本人にやらせなさいとい
うものでしたが、それでは短絡
的に過ぎると、新しく取り入れ

居老人、というキーワードも重
要となっています。家族機能
が働きづらいついこうした高齢者
の情報を得るだけ早く連携
できるような千葉県では「地域
生活連携シート」を使用。ケア
マネジャーが常に情報を更新
し、入院になった時など、すぐ
に病院に届ける仕組みが構築
されています。

利用者が一番近いから 担う役割は大きい

ケアマネジャーの仕事は、利
用者に必要な介護サービスを
提案し、ケアプランを作成す
ること。しかし、その枠を超えた仕
事も膨大にあると助川さんは
訴えます。

「地域包括ケアが推進される中
では利用者の日常的な、例えば
電球を交換したい、雑草を取り
たい、ストーブがつかない……と
いったもつと身近な手助けも
求められます。もちろん、「そ
こまでは業務範囲外なので私
はやりません」というスタンス
のケアマネジャーさんもおら
れますし、無理強いはいしません
が、私自身は、ケアマネジャー
が相談に乗って解決する手助
けが必要だと思えます。なぜ
ならこうした日常のサポート
にこそ、ゆくゆく介護負担を
減らす鍵があると考えるから
です。もし雑草を放置して高
齢者がつまずけば、たちまち重
度介護者になってしまうかも



Mishiho Sukegawa

昭和56年に身体障害者に関する相談員として福祉の世界に入り、特に脳卒中後遺症など中途障害者の通所リハビリテーション相談を担当。平成7年に船橋市東部在宅介護支援センター、平成15年に船橋市前原在宅介護支援センターのセンター長、平成17年に千葉県香取郡神崎町の特別養護老人ホーム「じょうもんの郷」施設長就任。平成24年度からは地域包括ケアの実践を行うために千葉福祉総合研究所を設立。

られたICF(人間の生活機能
と障害の分類法)を学ぶほどに
わかってきました。まず大切
なのは、現状の行動と、本人が
持つ潜在能力を最大限に発揮
した場合とでは、どれくらいズ
レがあるか、きちんと見極める
こと。その上で、現状と潜在能
力のズレを減らしていく、つま
り潜在能力を發揮するために
何ができるかという観点から
のケアプラン作成が今後の望
むべき方向だと考えます」
例えば、助川さんが実際に担

りませんか？

未然に防ぐ視点で、助川さん
は次のように指摘します。

「福祉用具の貸与基準が見直さ
れましたが、要介護度で分ける
方法には疑問があります。例
えば要支援の方でも立ち上が
り時にふらついたりして転倒
リスクが生じる場合がありま
す。私たちケアマネジャーが
アセスメントの結果、必要とい
うものはサービス担当者議
で皆に承認されていくので、ぜ
ひ認めてほしい。認知症や障
害者の自立度、さらに疾患別
と、福祉用具貸与の分け方に
は、まだまだ知恵が必要です」

進化する介護の未来形は ユニバーサルデザイン

日本福祉用具供給協会の理
事でもある助川さんに、福祉用
具メーカーに期待することも
伺ってみました。

「福祉用具と、ユニバーサルデ
ザインの境目がなくなってい
くといいいですね。高齢者に優
しいものは、一般の方にも優
しいものなんです。タイカルの床
ずれ防止用マットレスは、高
齢者のみならずぎっくり腰やヘ
ルニアに悩む若い人にもいい
でしょ？介護用に作ったものが
世の中のためになる。夢があ
るじゃないですか！」

夢という、日本のIT技術
が介護分野でもっと活かされ
ることも助川さんの夢です。

当した50歳代の糖尿病の方は
両下肢欠損で立位も歩行も不
可でした。が、義足がうまく
合って立位可能となり、ロフス
トランドクラッチ(ひじ掛け付
きの杖の使用で歩行も可能
に。本人の身体構造から見れ
ば要介護度は重度でも福祉用
具によって本人の潜在能力が
發揮され、できることが増えた
といえます。

け人の手を借りず自立した生
活を送りたいのは、介護を必要
とする高齢者の方も同じです。
本人の能力を補完する用具を
考え、住環境を整え、それでも
できない部分に初めて人の手
を添える。これこそ本当の自
立支援型ケアプランです。こ
うしたプラン作りができるよ
う、これからのケアマネジャー
は、ケアマネジメント力の進
化・深化・真価という、三つのし
んかをしなければならぬとい
うと考えています」

「自動運転の車もそうですし、
装着式の筋肉増強マシンが衣
類にまで進化すれば、介護従
事者のユニフォームにできそ
う。日本の技術革新は素晴らしい
ですから、3年後も今と同
じ環境とは考えない方がいい
ですね。技術を上手に取り入
れ、本当に必要な部分にだけ
人的労力を使うよう、切り替
えていかなければ、確実に進
化する将来を見据えた介護の
在り方を、今から考えるべきで

す。外国人介護従事者や介護
ロボットが普通になる未来も、
そう遠くではありません。将
来の介護の現場では、介護ロボ
ットを使用し、外国人介護従
事者を日本人リリーダが総括
しながら働くようになるだろ
うと思います」
介護の深化が、世の中を進化
させる。助川さんの考えるケ
アマネジャーの真価は、目前に
迫る大介護時代をポジティブ
に照らします。

上/さまざまな肩書を持つ助川
さん。現在はご自宅を拠点に千
葉福祉総合研究所を立ち上げ、
認知症の方の介護を大きなテ
マとして取り組んでいらっし
やいます。「健康な人しか住めない
地域ではなく、認知症になって
しまっても怖くない地域づくり
をしなければ」
下/【ひもときシート】と呼ぶア
セスメントシート。利用者の最
も気になる状態を中央に置き、
それに対する気付きを周囲の枠に
書き込んでいくという、曼荼羅
図を描くような方法で分析して
いく。「ケアマネジャーはもちろ
ん、医師やヘルパーなどチーム
で分析することが大切。さまざま
な角度から情報が集まれば、利
用者が理解でき、本当に必要な
支援も見えてきます」



Special Contribution

中国・広東省の褥瘡ケアの現状

中国・広東省にある「中山大学附属腫瘍防治センター」高級看護師ETナースの鄭さんは、普段は臨床の看護師として褥瘡外来診療に当たり、オストミナーズ学校では副校長として後進の指導にも当たられるなど、同省を中心に褥瘡対策に日々奮闘されています。10月に日本にお越しの際には、「医療介護施設や」第42回国際福祉機器展」を見学され、日本の

褥瘡対策の情報を熱心に収集されてきました。そんな鄭さんに、広東省における褥瘡対策の現状と今後の展望についてご寄稿いただきました。

中国では高齢化の加速に伴って、高齢者の皮膚のケアはますます注目されています。褥瘡は私たち臨床看護師の課題であるだけでなく、病院看護の質においても重要な指標の一

つであるため、各病院で褥瘡管理を重視している。今回は中国主として広東省を中心とした褥瘡ケアの現状を紹介する。

一 褥瘡ケアの指標管理

1 職種および職能
各病院で広東省看護管理業務マニュアルを作成し、褥瘡管理チームによる褥瘡管理指針を制定している。褥瘡管理チー



テイメイシュン
鄭美春さん(右)
●ET ナース
●中山大学腫瘍防治センター 高級看護師
●中山大学オストミナーズ学校 副校長
●WCET 中国代表
●広東省オストミー・創傷専門委員会副委員長

チャウエン コウ
張艶紅さん(左)
●ET ナース
●東莞市大郎医院 看護部副主任
●広東省オストミー・創傷専門委員会委員
●東莞市オストミー・創傷専門委員会組織委員

瘡がある患者に対し指導やケアを行っている。また、2015年は衛生部主導による第三期地域WOCナース研修を試験的に実施した(第4期も12月に開催予定)。さらに2016年は地域で、専門看護師認定の養成課程を計画している。こうした取り組みは、地域の方の長期的な看護技術向上に有効である。

二 褥瘡予防およびケア

1 褥瘡発生ハイリスク患者の判定
各病院では褥瘡発生リスクをアセスメントしており、主に使用しているスケールはBraden・Waterlow・Nortonの3種類である。OHスケールは、中国では導入が遅かったため現時点では臨床で普及していない。ただし、筆者はセミナーでOHスケールも臨床で活用するよう看護師に勧めている。

2 褥瘡予防技術

褥瘡予防技術は、ここ10年ほどで大きな進化を遂げたため、現在では各病院の褥瘡予防の意識は非常に高い。静止型マットレス、電動圧切り替え型マットレス、くさび形クッションな

ど、褥瘡予防用具を導入している病院は少なくない。また、タイカの協力によって日本の専門家を招き、褥瘡予防ケアの新しい技術・理念、例えば、正確な寝返り方法、圧とスレの排除方法、福祉用具などを紹介していただいた。

3 褥瘡治療技術

褥瘡治療技術は、ここ10年余りで予防よりもさらに急速に進化した。学術交流を通して、世界の先進的な治療理念や技術が多く、病院に普及し、治療効果が大幅に向上した。多数の3級病院と一部の2級病院は、退院した患者や地域の患者に対し、専門褥瘡ケア外来を開設している。

三 主要な問題点

1 各病院の褥瘡発生率や要因と褥瘡発生の因果関係を把握できていない。
2 褥瘡発生ハイリスク患者を限られた病院でしか管理できておらず、地域の高齢者および

高級看護師

中国の看護師資格の最高位。看護理論および国内外の情報を把握し、学術研究や看護技術のリーダーとして研究者を指導できる者である。日本における大学教授に相当する。



3級病院・2級病院

3級病院は市全体を対象として、高度な医療診療を行う500床以上の大規模病院。2級病院は市内各区を対象として、総合的に医療診療を行う100床以上500床未満の中規模病院。



過去の中山大学オストミナーズ学校の生徒たちとの集合写真など、鄭先生のデスク横には数々の思い出の写真が置いてある。



ムは、一般的に院内で責任のある立場の看護師のみで構成されており、褥瘡発生ハイリスク患者と既に褥瘡が発生している患者の問診を担当するとともに、褥瘡ケアの基本方針策定をはじめチーム研修、および褥瘡ケアの質の評価や改善などの活動をしている。しかし、政府が認定した褥瘡に関する学会や関連組織はまだ存在しない。

2 人材育成

中国でも、ETナース、オストミナーズ、WOCナースは、褥瘡ケアにおいて重要な役割を果たしている。広東省には、中国で最初に国際認可された「中山大学オストミナーズ学校」があり、これまでに245名のオストミナーズを養成している。また、広東省看護学会は、2012年より継続的にWOCナースの養成を行っており、既に130名を超える中核の臨床看護師を養成した。こうした人材育成の取り組みの結果、広東省ではETナース、オストミナーズ、WOCナースの資格を持つ看護師は300名近くまで増え、多くの病院で褥瘡ケアをリードしている。

3 患者管理

病院は入院患者の褥瘡対策に注力しているが、高齢者や障害者に対する地域サービスの体制が不十分であることが褥瘡発生率の増加を招いている。ただし、広東省衛生局はすでにこの問題に着目しており、看護マニュアル活動法案には地域で継続した褥瘡ケアができるよう、病院に褥瘡サービス規範を作成させることが盛り込まれている。既に一部では褥瘡外来を開設し、退院した褥瘡発生ハイリスク患者および褥

四 今後の展望

1 専門家の育成強化。
2 社会団体との協力体制の強化。高齢者介護システム設立の推進。
3 一般の方を対象とした褥瘡予防教育。
4 日本の専門学術団体との交流学習のいっそうの強化。日本の成熟した介護経験、および褥瘡ケア技術を手本とした現状改善。

4 については、日本の専門家を広東省に招待する、または広東省を代表する看護師を日本へ派遣して、学術交流および臨床現場や展示会の視察などを行うのが効果的だと考えている。例えば、褥瘡予防デー(11月第3木曜日)や、日本の「国際福祉機器展」などはいい機会になると思う。この度「国際福祉機器展」を視察したが、日本の充実した介護保険の仕組みや福祉用具の理解を深めることができ有意義だった。日本社会の高齢者に対する尊重と配慮、またメーカーのブ口精神を感じる事ができ、今後の新しい看護理念や思考につなげていきたいと思っている。

(左)WCPTジャーナルの世界各国代表のETナースの一覧。鄭先生は現在中国のETナースの代表である。(右)中山大学腫瘍防治センターで開催された、第18回全国オストミナーズセミナーで講演する鄭先生。鄭先生は広東省を中心に多数の講演を持ち、褥瘡予防を啓蒙している。



助川未枝保さん×タイカ

巻頭インタビューにご登場いただいた助川さんとタイカの十数年来におよぶお付き合い。いつも身近でほほえんでいてくれる。助川さんはそんな存在なのです！



昨年イオン船橋店で開催したNPO法人千葉県主任介護支援専門員ネットワーク主催の介護セミナー「家族が気づき、地域で支える」をテーマに地元船橋での一般の方に向けた草の根活動です

”真面目で、柔軟で、包容力があってアグレッシブ。お人柄にいつぺんに惹かれました“

在宅でご利用者様の悩みは？実情は？

在宅でのアルファブラのご利用者が急激に増えていった平成15～16年ごろ、私たちは在宅の環境に関して深く知りたいことが山ほどあるのに、そのヒアリングが追い付かないという状況でした。「在宅のご利用者はどのようなことを不自由に思っているのだろうか？」「在宅の褥瘡対策の実情はどうなのだろうか？」「在宅と医療の連携はうまくいっているのだろうか？」。船橋市の居宅介護支援事業所で、初めて助川さんにお目にかかったのはそんな時期でした。

いろいろな気になっていたことをお聴きすると、気さくに教えてくださりながら話が進んでいく。そしてアグレッシブ。そんなお人柄に私たちはいつぺんに

惹かれてしまいました。そうしてその後、助川さんが職場を変えられるたびに追いかけていき、このあることにアドバースをいただけてきました。

船橋市を中心に実践的なセミナーも実施

私たちが実施しているセミナーにも理解を示してください、札幌で開催したセミナーまでわざわざ視察に来られたことでもあります。平成20年ごろからは、一緒にセミナーを実施するようになりました。助川さんの地元である船橋市を中心に在宅に携わる多くの職種との連携を促して、実習も交えた実践的な床ずれ対策セミナーを数回実施し、最近では地元の大きなモールとのコラボレーションでセミナーも実施しました。

助川さんの思う「連携」は、ご利用者とそのご家族、医療職、介護職、行政、地域の研究会、小売り業者、レンタル業者、メーカーなど、その範囲

がとても大きいを感じます。そして、まずは地元で！という意識が強いこと。日本介護支援専門員協会の常任理事というお立場から日本のケアマネジャーの役割を常に考えながら、まずは地元で実践される頼もしい姿に、母親のような安心感を抱きます。

今、在宅の環境では、これまで以上にあらゆる専門職がそれぞれ専門性と根拠をもって関わるようになり、ともするとご利用者やご家族の要望が取り残されてしまうことが懸念されます。そんな時だからこそ、いつもご利用者の近くでご利用者の代弁者として考える「ケアマネジャーの専門性」を私たちはサポートしていきたいと思っています。私たちが心からそう思うようになったことは、助川さんから学んだことが大きく影響しています。そのことに感謝をしつつ、今後も多くのことを学ばせていただきたいと思っています。

第1回 「Well-being」を考える

「Well-being（ウェル・ビーイング）」という言葉をご存じですか？身体的・精神的および社会的に良好な状態＝幸福と訳すことができます。今回コラム企画のお話をいただき、何をつづやきたいのかと考えてみました。褥瘡？ポジションング？移動？私が研修や原稿でいただくテーマはほとんどがこのような内容です。一番考えたいこと、伝えたいことは何だろうか。人の尊厳？権利擁護？ん、難しいことではなく、誰もが快適に「生まれてよかった！生きてよかった！」と思える：そんなことかなあと考えています。そのために大事なのは、自分のあるべき姿を考えることかなと思いついて、「Well-being」をテーマにいろんなことをつづやいてみたくなりました。

「Well-being」を考えるとやっぱり「人の尊厳」を考えなければならぬ。みなさんは尊厳をどのよう

うに考えますか？あらためて「尊厳とは何か？」と聞かれると答えにくかったりしませんか？でも、一つひとつの生活を、それぞれがどのようにあるべきなのか、自分だったらどのようにあつてほしいかを考えていくと答えは出てくるような気がします。答えは身近にあるような気がします。

例えば「寝る」ことをテーマに考えてみます。目の前の人が全サポートが必要な方であれば、サポートをするために何を考えるのでしょうか。褥瘡予防？排泄物がおむつから漏れないように？そもそも就寝すること、睡眠は何か。もちろん体と脳を休息させるためです。そのためには快適でなければなりません。温度・湿度・明るさ・匂い・音・そして枕・マットレスやかけ布団、傍らに存在するサポートする人のあり方：全ての環境が良い条件に整って体

がリラックスでき、快適な眠りが得られます。病气や障害があれば、なおさら良き睡眠を得てほしいと思います。しかしながらケア現場ではどうでしょうか。単に褥瘡を作らなければ良いのでしょうか。2時間おきに向きを変えるだけを意識する体交は何のため、誰のためなのでしょう。快適な睡眠時間、副交感神経を優位にする時間を作り健康的な生活を守る、保障することが私たちに求められていることにはず。圧分散だけを考えるのではなく、人を見ませんか？寝ることへの支援、睡眠の支援であることを忘れてはいないでしょうか。

新連載 下元佳子のつづやき

Yoshiko Shimomoto

理学療法士、ケアマネジャー、福祉用具プランナー。高知リハビリテーション学院卒業後、病院勤務を経て平成15年に合資会社オファーズを設立。平成20年、高齢者・障害者を取り巻く環境を良くすることを目的に「ナチュラル・ハートフルケアネットワーク」を立ち上げる。生き生きサポートセンターへ入るは高知代表、日本在宅褥瘡創傷ケア推進協会理事を務めている。著書に「モーションエイド—姿勢・動作の援助理論と実践法—」(中山書店)。



今年の国際福祉機器展のタイカブースでの下元さんによるセミナー「床ずれ予防のための姿勢管理 ～寝ること座ることの大切さ～」。Well-beingのためにとても大切なことですね。皆さん熱心に聴き入り、ブースからあふれてしまうほど好評でした。